

講演要旨

在宅・介護向け簡易懸濁用の「倉田—盛本式注入b a g」の紹介

株式会社モリモト医薬

盛本修司

1. はじめに

経管投与、胃ろう患者への投薬の方法として、日本の半数以上の病院において倉田式簡易懸濁法が用いられているが、現在は主に懸濁ボトル法やシリンジ法などの方法で行われており、従来の粉碎法と比較して、簡便になった反面、ボトルやシリンジを再使用しており、手間や安全面で問題があった。弊社は、それらの問題点を解決し、在宅でも容易に使用できる簡易懸濁注入バッグを倉田先生と共同開発したので紹介する。

2. 簡易懸濁法注入バッグの概要

(1) 「簡易懸濁法注入バッグのコンセプト」

透明密閉式容器を使用し、使い捨てを前提としているため、投与する薬を目視確認でき、安全、確実、衛生的な投薬が可能である。

(2) 「簡易懸濁法注入バッグの使い方」



(図1) 注入バッグの使用方法

(3) 簡易懸濁法の従来の問題点

- ・薬の溶け残りは、溶けるまで待つかボトルやシリンジを振って溶かすしかない。
- ・崩壊・懸濁の時間（基本10分）を守らないと薬剤の分解が始まる。
- ・高活性薬剤の入った錠剤の粉碎などを行う場合は、曝露の問題が伴う。

(4) 注入バッグのメリット

- ・容器に直接情報を書き込みができ、取り違えのミスを防げる。(図2)
- ・溶け残りは、容器の上から指で押し潰して溶かせチューブ詰まりを防げる。(図3)
- ・内容物が良く見えるため薬物が残らない。
- ・事前粉碎不要で、外部飛散の心配が無く、高活性薬剤に対しても液漏れがなく安全である。
- ・使い捨てのため、洗浄・乾燥の手間が省ける。



(図2) 患者名などラベル付き



(図3) 揉んで押し潰せる